

文 献 紹 介

加藤瑛二編著：

『中国文化の考古地理学的研究』

一誠社 2002年7月

B5版 416頁 5,250円

編著者は、現地主義を基本としていると本書にも記されるように、ほぼ中国一円を歩き、山城、陶磁をはじめとした研究をされてきている。中国という広大な土地や、スケールの大きい歴史を対象として現地調査を繰り返すには相当な情熱とエネルギーを有する。評者はまずその事に敬意を表したい。

さて、内容の紹介にはいるが、以下のように大きく三部にわかれている。

第1部 古代遺跡の立地環境

第2部 古代山城

第3部 陶磁と壁画の研究

全体に図や写真が多く使用され、遺跡について貴重な資料が提供されている。現地の研究者との共著の章もあり、執筆者には王 小蒙氏（陝西省考古研究所）、尹 国有氏（吉林省通化師範大学美術系）、田 彦国氏（内モンゴル赤峰市敖漢旗博物館）、唐 洪源氏（吉林省遼源市文物局）、齊美多吉氏（西藏大学地理系）、楊 郁華氏（中国地理研究所）が名を連ね、近年中国で発刊された報告書による成果も多く取り入れられている点が特徴として挙げられる。

第1部の古代遺跡の立地環境では、第1章「中国紅山地域の古代遺跡の立地環境」において、新石器時代の文化である紅山文化遺跡の分布地域のうち、敖漢旗や南部の凌源地域の遺跡立地と気候、地形との関連について論じている。第2章「中国古代文明の発達と仰韶期の海進の研究」では、古代文明の地点がなぜ高位の地形面に立地し、歴史時代の遺跡が低位の地形面に立地するのかを考察している。

第3章「中国華北平野の古代遺跡の立地環境」では、貝類や井戸の出土例から立地環境を明らかにした。第4章「松花江中流域における新石器時代の自然環境」では、32の新石器時代の遺址について個別に説明し、新石器考古文化の特徴や海進との関係を述べている。

第5章「黒竜江・松花江下流における新石器時代遺址の自然環境」では、現地調査によって得られた石器や土器に関する知見を紹介し、古環境の推定復原を試みた。またこの地域には、草原文化と河川文化の融合地域が発達したと結論づけた。第6章「彩陶文化圏における遺跡の立地と陶窯の源流」では、青海省、甘粛省の文献資料を蒐集するとともに、現地調査をもとに高位の地形面に遺跡が立地する理由と、露天焼成が出現しない理由について考察されている。

第2部の古代山城には、7章から11章までが当てられた。第10章「中国の山城の一考察」の中で著者が触れているように、日本の山城研究に比べて中国での古城の研究は、多くの解明には至っていない。そこで第7章では、「吉林省・遼寧省の漢代山城に関する研究」と題して、中国東北地区の中部で漢代山城の立地や規模、構造の調査を行い、19のものについて個別に記述し、高句麗山城との違いや関係を整理している。ここでは、山頂を二重にした城垣のある山城は高句麗山城と区別され、このような小型の山城が後に高句麗山城の築造のモデルになったと推定する。これらの城が相互に連絡し、漢代長城式の守備戦線が設置されたとしている。

第8章「赤峰市敖漢旗地区における夏家店下層文化山城の分布と機能に関する考察」では、夏一商代早期に相当する時代の山城について、孟克河流域の分布、個々のグループの概要を述べ、分類を行った上でその機能と役割について言及された。

第9章では、「赤峰市敖漢旗城子山山城の構造と配置に関する研究」として、山城の調査報告がなされている。この山城は正式な発掘調査が実施されていないため、観察や野外調査による実測は意味を持つものである。夏家店下層文化の社会发展段階の祭祀の対象と形式、原始的宗教の発展の背景と各勢力集団の興亡に関する貴重な資料として紹介されている。

前述の第10章「中国の山城の一考察」では、山城の研究史や朝鮮の山城についても触れながら、中国側の研究成果を中心として、中国東北部の朝

鮮式山城の形態と地形的な関連が検討された。その結果、山城が多いのは高句麗の支配した地域であり、それらを3種類に分類した。また山地頂部と稜線あるいは丘陵斜面を利用した山城の形態は、日本の朝鮮式山城の原型に相当するとしている。

第11章「中国遼寧省の高句麗山城」では、高句麗山城を立地する地形との関わりで6つに分類し、その変化の過程を推定した。また最盛期の構成要素のモデル的形態を提示し、立地に水運依存の性格を指摘する。朝鮮式山城の問題は、日本においても重要な課題であり、平城としての都城との関係など、中国、朝鮮半島、日本の考古学の成果を取り入れながら研究が進められるべき問題である¹⁾。本書は中国の発掘報告書が多数引用されており、また山城の調査を数多く行なうことは立地上も困難な中、現地の写真が掲載されている点でも価値を持つ。

第3部の陶磁と壁画の研究の紹介にうつりたい。第12章「中国の土器の露天焼成と陶窯の発達」では、どのようなものであるか明確に分類されていない土器の露天焼成について、中国に現存する露天焼成の方法を1994年から1998年の現地調査を中心として考察している。その結果、5種類の露天焼成が現存し、これらと穴窯の発達は自然環境の影響を大きく受け、地域的に陶窯の発達形態が異なると推定した。

第13章「貴州省の陶磁業と土器の生産—農村工業の展開—」は、研究事例の多くない伝統工業に属する陶磁業と土器の生産の特質について考察したとする。この地域では明代に導入された陶磁業が、政治的要因によって1950年代にピークを迎え、経済的・技術的要因によって後退した。爬坡（パーポー）窯と砂鍋（サーコー）窯は土器の生産方法であり、燃料は、前者は木材資源、後者は石炭であり、二者は燃料立地を基礎としたものであることを確認した、と結論づけている。第14章「日本と中国の陶業傾斜地集落の形成」では、それぞれ新しい陶業集落の形成過程が、丘陵地に窯を建設し、傾斜地集落を形成するという類似の立地的要因を基盤にもち、技術移動を伴う同族集団によって発展したことを指摘している。

第15章「唐三彩枕」では、中国国外で発見された唐三彩器の中で、もっとも数量が多いのは枕で

あり、中国以外においては、日本で発見された陶磁質枕がもっとも多いことから、その造形、装飾工芸、また年代について考察が加えられた。第16章「唐三彩生産の発展の軌跡」では、墓や遺跡および窯跡から出土した唐三彩について整理を行い、唐三彩の生産の状況について、歴史的な展開を追っている。

第17章「高句麗瓦当の研究」では、秦漢の瓦当と異なり研究が少ない高句麗の瓦当に着目し、分類、構図や造形などの特質を分析した。さらに文様の意味、宗教的背景についても述べている。第18章「高句麗の祭祀と墓室壁画中の「社樹」」では、高句麗の主な祭祀として、天を祭ることと社稷を祭ることを挙げる。このうち社稷を祭る場合に、土垣に囲まれた土壇に木を立てて祭祀を行なう地方があり、その場合は木で社神を代表させていることから、木を祭ることの重要性を指摘する。さらに高句麗壁画にみる社樹に、異文化の影響の可能性を見出している。

第19章「新たに出土した唐代皇女・皇太子墓と日本高松塚」では、1994年から1995年にかけて発掘された唐皇室の墓について、構造と壁画の分析を行い、高松塚古墳の壁画との比較を試みている。

以上、評者が著者の広い関心と研究対象を的確に把握できていないことを恐れるが、欲を言えば、本書で扱われた諸地域を中国全体の中に位置づけられる概説的な地図など、地図に関する工夫が望まれる。しかし「はじめに」や「あとがき」にあらわれる著者の研究姿勢にも学ぶところが多く、時期が遅くなってしまったが、ここに紹介させていただいた。

(山近久美子)

【注】

- 1) 高句麗山城と後述の墓については、森浩一監修 東潮・田中俊明編著『高句麗の歴史と遺跡』中央公論社、1995でも扱われている。